

# LIBRARY NEWS

令和4年10月28日 No.7

新座市立第三中学校

校長 和久井 功雄

(図書室だより) 図書整理員 名本 浩子

木々の葉が、毎日見るごとに、赤、黄色、<sup>だいだい</sup>「橙」と色づいていきます。もともと、多くの葉は、さまざまな緑色をしているのに、秋に、木の葉が“色づく”というのも、四季のある日本ならではの表現ではないでしょうか。

今週は、冬のような寒い日もありました。標高の高い山では、紅葉を乗り越えて、<sup>はつかんせつ</sup>初冠雪を記録したところがあったようです。秋が、急いで過ぎ去ってしまうのではないかと気にかけていましたが、蛇口から出る水を受ける手が、冬のような冷たさはまだないと感じ、ほっとしています。

春が「花」たちの競演であり、私たちを楽しませてくれる饗宴<sup>きやうえん</sup>であるように、秋は、「木の葉」たちの晴れの舞台です。詩人、新川和江さんの詩、『名づけられた葉』の中の言葉にあるように、「葉脈<sup>ようみゃく</sup>の走らせ方」や「<sup>きざみ</sup>刻みのいれ方」、「うつくしく散る法」を考え、せいっぱい輝いて散っていく。たとえ、どんなに風が強くとも、ぎりぎりまで枝にしがみついて。

この「木の葉」を題材にした『最後の一葉』という短編があります。画家を夢見ていたスーとジョンジー。だが、ジョンジーは肺炎にかかり、すっかり生きる希望を失う。「窓から見える隣の家のツタの葉が落ちるときに、自分も死んでしまう。」と。<sup>おろり</sup>折しも嵐になり、ツタの葉はすべて落ちてしまいそうだ。翌日、カーテンを開けると、一枚だけ葉が残っていた。嵐はひどくなる一方だったが、その次の日も、最後一枚は散らなかった。ようやく、ジョンジーは生きる希望を見だし、快方に向かう。嵐だったのに、なぜ、最後一枚は散らなかったのか。そして、最後一枚の裏側に隠された悲しい真実。

今回は、この『最後の一葉』の作者を問うクイズです。

- ① 「踊る人形」、「最後の事件」の作者 アーサー・コナン・ドイル
- ② 「老人と海」、「日はまた昇る」の作者 アーネスト・ヘミングウェイ
- ③ 「賢者の贈り物」、「魔女のパン」の作者 オー・ヘンリー



前号のクイズ、本の中の世界に入り込んでいき、<sup>めつぼう</sup>滅亡寸前だった国を救うという、映画にもなった、ファンタジー小説は、②のミヒャエル・エンデ 作 『はてしない物語』でした。他の選択肢だった『ナルニア国物語』や『指輪物語』も映画になり、多くの人の心をつかんだ<sup>ふききゆう</sup>不朽の名作です。

今回のクイズのヒントの本は、分類番号「933」（外国の文学）、国語の教科書関連本の特設コーナーにあります。短編集は、朝読書にも最適です。外国の作家の短編集も読んでみてください。

## 読書週間

10月27日(木)

～11月9日(水)

読書で心が震える体験は、何物にも代え難い奇跡のようなものだと思います。そして、自分の未来にはそんな奇跡がまだまだたくさん待っているという妙な確信もあります。本に関わっているすべての人に感謝を伝えたいです。

標語の作者 天野耕平さん

## ハロウィンしおりゲットキャンペーン

10月24日(月)～10月31日(月)

期間中、図書室で本を借りた人に、ハロウィンのかわいい“しおり”を もれなくプレゼント！全10種。

好評につき、**11月7日(月)**まで、期間延長！

お気に入りのしおりをゲットしに、図書室に来てください！



2022 読書週間標語  
「この一冊に、ありがとう」



今回は、まず、『〇〇賞』と名の付く受賞作品から紹介します。

『海をあげる』 上間 陽子/著

(筑摩書房)

Yahoo!|本屋大賞 2021  
ノンフィクション本大賞



自分のこと、祖父や祖母のこと、娘のこと。戦時中の話。沖縄での生活の記録とも、私小説とも言えるかもしれない。けれど、あとがきに、こう筆者は言っている。「この本を読んでくださる方に、私は私の絶望を託しました。」と。沖縄が復帰して50年。基地から飛び立つジェット機の爆音。生活水の汚染。辺野古新基地のための埋め立て。沖縄の抱えている問題が、作品に影を落とす。「海をあげる」というタイトル。

【沖縄書店大賞】 【第14回|池田晶子記念】  
沖縄部門大賞 わたくし、つまり Nobody 賞

筆者の、読者への切実なメッセージを感じるでしょう。

『弁理士・大鳳 未来 特許やぶりの女王』

南原 詠/著 (宝島社)



2022年・第20回  
「このミステリーが  
すごい!大賞」大賞受賞

『密室黄金時代の殺人 雪の館と六つのトリック』

鴨崎 暖炬/著 (宝島社)



2022年・第20回  
「このミステリーが  
すごい!大賞」  
文庫グランプリ受賞

同じ作家の作品を読み比べてみよう!

早見 和真/著

『八月の母』 (KADOKAWA)



地方に閉じふさがれた生活。この町を出たいと願う娘と必死にすぎりつく母親。強烈な愛と憎しみで結ばれた母と娘の長く狂おしい物語。(出版社の紹介から)

ここにあるのは、かつて見たことのない絶望か、希望か――。

『笑うマトリョーシカ』 (文藝春秋)



圧倒的な魅力で、官房長官まで上りつめた青年代議士と秘書。彼らに違和感を持った記者が、隠された過去を暴くために取材を重ねるが…。二人の青年の「友情」と「裏切り」の物語。(商品解説より)

—この官房長官が、誰かの操り人形だったら?

気になるミステリー

『誰かがこの町で』

佐野 広実/著 (講談社)



高級住宅街の恐ろしい秘密。19年前に何が起きたのか。

今、どこかで起きているかもしれない。明日、巻き込まれるかもしれない。その時、あなたはどのようにする。

芸術の秋



『描きたい!!を信じる少年ジャンプがどうしても伝えたいマンガの描き方』 週刊少年ジャンプ編集部 (集英社)  
“マンガを楽しく描いて上手くなる“ための1冊!!”

伝える技



『バナナの魅力を100文字で伝えてください 誰でも身につく36の伝える法則』 柿内 尚文/編  
伝えているのに、伝わっていない。大切なのは伝える技術ではなく、伝える技術。



文房具も日々進化。手に入りたい文房具が見つかるかな?

蔵書点検のお知らせ

期間 11月8日(火)~11月30日(水)

期間中は、昼休み、放課後とも、図書室は閉室になります。

長期間、ご迷惑をおかけしますが、ご協力よろしくお願いします。

本の貸し出しはありません。本の返却は、返却BOXに入れてください。

